

わたしの原風景

12 得田之久

とくだゆきひさ／絵本作家



イラスト／石川えりこ

僕の少年期を過ごした地は神奈川県茅ヶ崎である。茅ヶ崎といえ
ば、今では湘南と呼ばれ文化的でお洒落な所と思われる。しかし
その頃の茅ヶ崎は豊かな自然が残るのかな地方都市であったので、
この地で育った者はこの呼び名に違和感があり、今でも仲間たちが集
まると「僕らは湘南先住民だよね」と話している。

僕らの少年時代は戦後の混乱期で、親たちは生活に追われていたの
で子どもたちは大いに自由を謳歌していた。特に夏休みの僕らの遊び
方は、現在の子どもたちには想像もつかない野蛮で破天荒なもので
あった。

ギンヤンマを追いかけてたり（足元を見ないで肥溜めに落ちた。田ん
ぼの畦道を壊して農家の人に追いかけられた）、木の上に秘密基地を
作ったり（沢山乗り過ぎて床が抜け二名負傷）、海岸に落ちている流
木で筏（いかた）作りリヤカーに乗せて数キロ先の溜め池まで運んだり（見事
に沈没して溺れかかった）、丘の上に建つお稲荷さんの祠の下に隠れ
家を作ったり（天井の土が崩れ祠が傾いて大目玉をくらう）等々。

あの頃の僕は正にトム・ソーヤであり、友人たちは皆ハックルベ
リー・フィンだった。そんな遊びの中で夏休みの最大のイベントは、
僕らがよく遊んでいた小川（幅は二メートル、深さは僕らの膝小僧
位）をせき止めて魚を獲る遊びであった。日照りが続いた夏の後半、
小川の水量が減ると十数人の子が小川に集結（当時の子どもの世界は
縦社会がなく、年齢の違う男の子も女の子も集団で遊んでいた。根
に土が着いた草や板きれを利用し、見事な連携プレーで小川をせき止
めると俊敏で足の速い選ばれた子がバケツを持って川下に走り出し、
干上がった川から、普段では捕まえる事の出来ない大きな鮒や鯉や鰻
などを捕まえるという遊びであった。

あの頃の夏休みの強烈なエピソードとその時感じた思いは僕らの個
性を養い、身体の中にくっきりと年輪となって残り、その後の人生の
失敗や挫折に負けられない力となっていると思う。